

野尻小左衛門のくどき

作 榎木八郎

ここは八幡の 飯山麓

いいやまふもと

小さな御堂 みどう 歴史を語る

祭られたるは まつ その又昔

享保は十八 きょうほ 飢饉の時に じきそ

直訴し給い くびは 無念の極み

首刎ねられし こざえもんさま 小左衛門様 くよう

後の世迄も なさけ 供養をせんと

情も厚き すがたしの 人々集い

姿偲んで くよう 供養の踊り

供養の踊り 供養の踊り

くよう

供養の為に その又昔

くど

姿俣ぶ 口説きを聞いて

おの

己れがあるを 想ってみよや

しかばね

人の死したる その屍の

おのれ

上に居座る 己の身をば

か

命を懸けて 八幡の人の

やわた

いのちまも

命守りたる 小左衛門様

ころ

小左衛門様 小さき頃は

やさ

とと

優しき父や 母様そばに

かかさま

のばな

魚取ったり 野花を摘んで

はだし か

木の実集めて 跣で駈けて

よる

夜ともなれば 皆打ち連れて

みなう っ

ゆだに　ゆ　つか　なお
湯谷のお湯に　疲れを治し

よもやまばな　むらびと

四方山話し　村人ひとつ

むら　ひとびと　はな　なか

村の人々　話しの中に

あ　はだみ　ぬくさ

もやい合いたる　肌身の温さ

あまた

ぐすうない事　数多にあれど

ひやくしやうねんぐ

百姓年貢　もやいていこう

ひとこころ

一つ心に　ならなけりや

とてもこの世は　過すごして行けぬ

こま

困る一人も　あつてはならぬ

ふへいふまん

不平不満は　話の中で

すじみち

何が悪いか　筋道立てて

と

想い思えば　わかつて解ける

ゆだに

湯谷のお湯の 語りの広場

はだ ふ

肌の触れ合い 確かめられて

たし

ぬく

もやい会う湯に 確かな温み

こぎ

話の中で 小さな小左が

か

じつと聞きたる 賢しこき者よ

わら

家に帰れば 藁打ちながら

とと

父さんしつかり 申する事にや

わず

月に僅かな お湯入りだけど

はな

話しの中で 聞いたであろう

みす

見捨てならんぞ 何時何時迄も

いついつまで

こま

悲しむ人や 困りておれば

やさ

母が優しく 申する事にや

人が生まれて

にんげんさま
人間様じや

ふまん
不満のあるも

人間様じや

心開いて

あげるが肝心

かんじん

忘れず育て

こざえもん
これ小左衛門

幼な心に

ととかか
父母さんの

はだふ
肌触れ合いの
いいやまあお
語りを聞いて

飯山仰ぎ

大きく育つ

話をまとめ

みなこま
皆困ること

すべてをう受けて
どなたの前も

どうどうはな
堂々話して

聞かせてとらす

どんな苦しい

かくご
仕置きも覚悟

じつと耐えたぬ抜く

ちから
力がごござる

人間様の 悪口噂

わるぐちうわさ

口が裂けても くち さ 話してならぬ

強い心を も 持ってはござる

日々を暮らして ひび く 年年暮らし ねんねん

もやいもやいて ねんぐ 仲良く湯船 ゆぶね

重い年貢も しごと もやいて納め

仕事勉めて しごと 新らし暮らし

心同じき よめじよ 嫁女も求め

百姓仕事 ひやくしやうしごと 昼夜なくて ひるよる

泥にまみれた どろ 身体であれど からだ

心明るく さつき 皐月の風を

贈りて円く まろ 悩める事も

皆みなと語らい もやいて暮らす

村の人々ひとびと 申する事に

暗い顔して 話して泣くに

餓死餓死だ 生きては行けぬ

浮塵子うんかこんなに 湧わき出て来るに

稲も草木もくさき 食い荒らされて

出来るお米は しいなでばかり

様子眺めて 小左こざさん悩む

虫を退治る やり方ないか

光集まる 夜の虫むし多く

つけて松明たいまつ 虫焼むしやきやろう

村の人々 申して駈かける

虫は僅わずかに 焼け死ぬけれど

とてもこの虫 多あすぎ暴れる

荒れる眺ながめて 小左こざさん言うに

米が出来ない 木の根も探さがそ

飢うえに備えて 貯たくわえ作ろ

村の人達 言葉ことばによつて

木の根掘つたり 木の葉も摘つんで

女子おんなこどもも 一ひとつ緒になつて

干物ひもの作りや 食たべらる限り

すべて集めて 餓死がしんの備え

そこへ武士むし 来て申すには

ここで騒さわぐな お年貢米ねんぐまいは

との 殿とのに納める 大事の物よ

やいば 刃やいば突き付け 厳ふしいお触ふれ

とも 供ともを引き連れ 戸毎こゝろごとに歩き

牛うしに引かせて 練ねり練ねり歩き

床とこも剥はがして 天井てんじょうも突つつき

もみたねまで 粃種もみたね迄も 取り立て歩あく

村むらの人々 申まをして嘆なげく

もみたね 粃種もみたねなくば 来年米らいねんまいは

作てる手立たても かなしきことよ

そこで役人やくにん 大お声上こゑあげて

弱い者よわども この世このよに要いらぬ

強い奴やつだけ いよいよ残れ

ここで小左こざさん 嘆きて申す

みんな居てこそ 楽しい世せけん間

弱い者こそ この世の宝たから

弱い者程ほど 伸び伸び生きる

世せけん間作るが 優しい人が

そこで役人やくにん 怒りて申す

弱い者ども 年貢ねんぐは出せぬ

米を作れぬ 奴やつらがいれば

米は不足で 皆飢うえ死にじや

強者きやうしやが生きる 世の習わしじや

そこで小左こざさん 重ねて申す

それは理不尽りふじん 役人様よ

こんな激しいはげ 餓死がしんの年に

命切り捨て 無理難題むりなんだいで

年貢取り立て 止めるしとうが至当

そこへ村人 声こえひそませて

長いものには 巻まかれるみんな

難儀なんぎ押しつけ ようようわかる

わかるけれども 巻まかれて生きる

お役人様やくにんさま 気を荒立てる

気を荒立てりや 後後怖のちのちこわい

そこへ藤武さんとうぶ 静かに申す

あいや皆さんみな この事ばかり

小左さんこざ言うが 当たりでうげてる

みんながしん餓死で死んでる中に

お役人衆やくにんしゅうの 無理事むりごと通る

そこで村人 急せき込み申す

無理むりははねのけ みんなで心こころ

合わせてひとつ 傘連判かされんぱんを

誰も責め取る 覚悟かくごを定め

命守りて 一揆いっきを起こす

堅くかたく定めて おりますけれど

一揆いっき治める その時来れば

私ひとりで 責負せきおいましょう

連座れんざきび厳しく 妻子つまこにかかる

こよいかぎ
今宵限りに 離縁を申す
りえん

つま
子なく妻なく なくしてひとり

あわ つまこ
哀れ妻子は ふと取り縋り
すが

ころ
あなた殺して 私は生きぬ

のこ
ひとり残るは 私は嫌じや
いや

こざ
強く小左さん 申して聞かす

けつ な
たとえ死すとも 決して泣くな

あらた
共に生きゆく 世に改めて

ぼんおど
盆が来たなら 皆盆踊り

しず
踊り踊りて 静かに思え

あらた
共に生き行く 世に改める

おも
踊り踊りて もやいて想え

共に生き行く 新しき世をよ

みどう

御堂静かに 飯山仰ぐ

みどう

御堂静かに 飯山仰ぐ

【この作品について……取り纏め者記述】

八幡にはここで口説く小左衛門さんをはじめの数多くの方々が命を捨て村人の命を守り育てておられる。しかし残念なことに記録も少ない。加えて流れの中で忘れられようとしている。

このような中で口説きは創作されたものである。異論も多々あると考えられる。

これを一つの足がかりとして更にふさわしいものが残されることを熱望してやまない。

榎木八郎

